

中友会通信

新春号
vol.8 2026.1

揮毫 福田康夫 元内閣総理大臣、中友会最高顧問

DuanPress
日本僑報社 発行
since 1996

問い合わせ先 中友会事務局
豊島区西池袋3-17-15 湖南会館
Tel : 03-5956-2808
Mail : zyh@duan.jp



竹谷とし子参議院議員 新春インタビュー

「わだかまりを解くためには、 自分の目で見ることが大事だ」

—— 対話と交流で未来を築く日中関係 ——



中国大使館から特別賞の賞状と受賞作品集を受け取った竹谷とし子議員（段躍中撮影）

国交正常化から半世紀を超えた今も、日中関係はさまざまな課題を抱えている。

そうした中で、「対話」と「人と人との交流」を何より重視し、現場に足を運び続けてきた政治家がいる。

第8回「忘れられない中国滞在エピソード」特別賞を受賞された、公明党代表代行の竹谷とし子参議院議員に、日中交流への思いと、その原点について話を伺った。

——中国との関わりは、いつ頃から意識されていたのでしょうか。

正直に言えば、若い頃から中国の長い歴史や文化には強い関心と憧れを持っていましたが、留学や長期滞在の経験はありませんでした。学生時代は資格試験の準備に追われ、社会人になってからは、女性にとって厳しい社会の中でまずは自分の力をつけ、仕事を通じて社会に貢献したい一心で働いていました。

2010年に国会議員に初当選するまで、中国との直接の関わりといえば、上海を一度観光で訪れた程度でした。

——創価大学で学ばれた経験も、日中観に影響を与えていますか。

はい。私の母校・創価大学は、1975年に中国から第1期国費留学生を受け入れて以来、中国の留学生と共に歩んできました。昨年は中国人留学生受け入れ50周年という節目の年でもありました。

学生時代から、北京大学をはじめとする中国の大学との交流が当たり前の環境にあり、日中友好の重要性は特別なことではなく、自然な価値観として受け止めていました。

——初めて本格的に中国を訪問されたのは、どのようなきっかけだったのでしょうか。

2013年8月、「国交正常化以来、最悪の時期」と言われていた中で、若手政治家有志による「日中次世代交流委員会」第1次訪中団の一員として北京・天津を訪れたことが転機でした。

関係が冷え切っている今だからこそ、中国を訪れ、多くの人に会い、率直に話を聞き、自分の目で今の中国を感じたい。すぐに成果が出なくても、中長期的な視点で若い世代との信頼関係を築き直したい、そんな思いでした。

——実際に訪中して、何を感じられましたか。

出発時点では、誰と会えるのかさえほとんど決まっていない状況でしたが、中国共産党対外連絡部や外務省の皆様の方で、多くの方と率直な意見交換ができました。

厳しい議論も多くありましたが、偶発的な衝突を防ぐための危機管理の重要性について、中国側にも同じ認識を持つ人がいることを確認できたことは大きな収穫でした。

「過去を忘れず、未来に目を向け、二度と悲劇を繰り返さない」——この時の思いは、今も私の政治の原点の一つです。

——その後も訪中を重ねておられますね。

2019年には第7次訪中団として北京・福州・厦門を訪れ、関係改善の積み重ねが確実に実を結んでいることを実感しました。

さらに2025年4月には、斉藤鉄夫公明党代表とともに訪中し、日本国民が抱く懸念を率直に伝えつつ、王滬寧全国政協主席との間で、対話を積み重ねることの重要性を共有できました。課題解決への道筋が見えたと感じています。

——若い世代との交流については、どのようにお考えですか。

修学旅行で来日した中国の中学生や、日中友好会館の事業で来日した若者たちとの交流は、いつも希望を感じさせてくれます。

また昨年の訪中の際に、清華大学の李佩先生が、直前の連絡にもかかわらずホテルまで訪ねてくださり、心のこもった贈り物を届けてくださいました。こうした一つ一つの出会いが、信頼を育てるのだと強く感じます。

——最後に、日中関係にとって大切なこととは何でしょうか。

中日友好協会の程永華常務副会長がおっしゃった「わだかまりを解くためには、自分の目で見るのが大事だ」という言葉に尽きると思います。

女性や青年など草の根の交流を広げ、一つ一つの出会いを大切にすることこそが、真に強固な日中関係を築く道だと確信しています。これからも努力を続けていきたいと思っています。



参議院議員 公明党代表代行 竹谷 とし子（たけや としこ）

1969年北海道標津町生まれ。創価大学卒。大学在学中に公認会計士試験に合格。女性国会議員で唯一の公認会計士。監査法人を経て、経営コンサルティング会社執行役員としてIT導入による経営改善に従事。2010年参院選で初当選し、現在三期目。

会計のプロ。の視点で税のムダ遣いに切り込み、国債整理基金の利払い費を年間約700億円削減。「食品ロス」削減の超党派議連事務局長・党プロジェクトチーム座長として「食品ロス削減推進法」制定（2019年）を主導。事業系食品ロスの半減目標達成に寄与した。

公認会計士、税理士、行政書士。党代表代行、党女性委員長。復興副大臣、財務大臣政務官、参院災害対策特別・総務・法務委員長等歴任。趣味：食品ロス削減や簡単な料理と動画投稿。

2025年、第8回「忘れられない中国滞在エピソード」特別賞を受賞。



中友会会員による
中国滞在体験談

私の中国物語

「私の中国物語」その①

中国で迎えた結婚式の日

大学院生 杉山 早紀



中国語での1分間スピーチで夫への思いを伝える杉山さん

早朝5時。花嫁の朝は早い。「そうだ、私は今日『花嫁さん』なんだ」。寝ぼけた頭が冴えていくにしたがって、だんだんと実感が湧いてきた。

2019年の国慶節、私は中国人の夫とともに、河南省鄭州市のとあるホテルで、結婚式の日を迎えた。普段日本で暮らす私たちは、この日のために中国へ来た。私は早朝から化粧、ヘアセット、着替え、撮影と大忙し。式は私の希望で中国式のものにしたため、衣装も、会場も、どこを見ても赤色だ。キリスト教式や日本式の神聖で厳粛な結婚式とは一味違い、華やかでおめでたい雰囲気が私は好きだ。真っ赤な布地にきらびやかな金色の装飾が美しい中国の花嫁衣裳「秀禾服」はずっしりと重く、鳳凰の形をした金色の冠も首を痛めそうなほど大きく重かった。異国で味わう非日常感に、私は終始どきどきしっぱなしだった。

しかし、浮かれてばかりはいられない。結婚式自体が初めての経験で、ましてや中国の結婚式については全体の流れや細かな作法など知らないことだらけだ。例えば、新婦は入場から舞台に上がるまでの花道の途中で、燃え

た火鉢をまたぐ。「新生活が火のように活気で溢れますように」という願いからだ。また、このように伝統的な結婚式では、司会者の言葉遣いも日常生活のそれとは異なる。司会者のどの言葉でどの動きをするのか、覚えるのに時間がかかった。前日に一通りリハーサルはしたものの、本番で間違えて恥をかくのではないかという不安が拭い切れない。

身支度を終え、まずはホテルから車で夫の実家に向かった。「早く子供に恵まれますように」という意味を込めて、棗、ピーナッツ、竜眼、蓮の実が入ったスープを口にするなど、いくつかの儀式を終え、再び車でホテルへ戻る。しかし式はまだ始まらない。部屋で待つ新婦を新郎が迎えにいくのだが、「大声で歌を歌う」「お金を渡す」など新婦側が出す様々な条件をクリアしなければ部屋に入れない。やっと部屋に入れたかと思うと、新婦の靴は部屋のどこかに隠されていて、新郎がそれを見つけ出さなければ新婦は出発できない。私はせっかくの化粧が崩れるほど笑い泣きしながら、「こんなにユニークで楽しい結婚式が他の国にあるだろうか？」とぼんやり考えた。

そんな賑やかな雰囲気から一転、お昼前から式が正式に始まった。入場の瞬間、会場を埋め尽くす来賓の多さとスポットライトの眩しさに、一瞬目がくらみそうになった。リハーサルの記憶を辿りながら、ミスなくこなすだけで精一杯だった。私にとって最大の難関は、新郎新婦がそれぞれ一分間相手への思いを述べるスピーチだ。大勢の前で、私にとっては第二外国語となる言語で、短いうで長い60秒間、一人で話し続けなければならない。私は前日の夜、夫への感謝の気持ち、将来への期待などを前もって原稿にまとめ、実際に時間を計りながら読んで念入りに練習していた。それでも本番は緊張で声が震えた。何度も練習したはずのピンインや四声も、もしかしたらめちゃくちゃだったかもしれない。しかし、建前

ではなく本音で話せた一分間だった。つたないながらも、言いたいことは全て伝えられた。気が付くと、私も夫も泣いていた。

式が終わり、今度は真っ赤なパーティードレスに着替え、「敬酒」に移った。新郎新婦がお酒を持って来賓の各テーブルを回る時間だ。式の最中は不安と緊張で気が回らなかったが、以前中国で会ったことのある夫の親戚や友人がたくさん来ていて、久しぶりに話すことができた。「結婚おめでとう！」「とっても綺麗だった！」「スピーチよかったよ！」などと口々に話しかけられるうちに、やっと緊張が解け、談笑を楽しむ余裕ができた。この日を迎えるまで、「日本人の花嫁なんて歓迎されるのだろうか？」という一抹の不安が心のどこかにあった。しかし笑顔と談笑の声に包まれた会場で、そんな不安は温かな幸福感に解かされていった。

中国で迎えたこの一日は、きっと一生忘れられない記憶になる。中国の成語でいうところの「入郷随俗」の貴重な体験だった。この結婚式を通して得た収穫が2つあ

る。1つ目は、中国の文化風俗に対する理解が一段と深まったこと。2つ目は、自分で考えた中国語で自分の思いを伝えられ、自信がついたこと。さらに結婚式から一年後、私は浙江大学の大学院に入学し、現在に至るまで「中国学」を専攻し勉強している。中国をもっと深く理解したい、中国語力を極限まで高めてみたい、という思いからだ。

2022年、日中国交正常化からちょうど50年を迎える。この意義ある一年を、私はやはり未来への期待感をもって迎えたい。たくさんの中国人と交流した今、私にとって中国は「隣国」であり「隣人」でもある。人と人との交流を通じて、海を隔てたこの「お隣さん」を正しく理解できる人が一人でも増えるよう願ってやまない。

杉山 早紀（すぎやま さき）

1994年広島県生まれ、兵庫県神戸市育ち。同志社大学文学部在学中に中国語の美しさや中国文化に惹かれ、2016年に「日中友好大学生訪中団」の一員として初の訪中。大学卒業後京都の老舗お茶屋へ入社、海外事業部に所属し、上海や台湾へ複数回出張。2018年に河南省出身の中国人男性と入籍し、2019年に中国にて挙式。2020年からは浙江大学大学院にて中国学を専攻し、中日文学を専門として研究に励んでいる。

「私の中国物語」その②

トウモロコシ畑の出会い

国家公務員 豊田 恭子

今まで、中国各地を旅行した。私は中国の古代史が好きで、ゆかりの地を訪れてきた。ただ、目的地が観光地ではないところが多く、道が分からずに現地の人に尋ねて回った。中国の人は親切だ。外国人でも、わざわざ目的地を探してまで案内してくれる。おかげで私は沢山のの人に助けられた。

2010年の夏、私は河南省新鄭市を訪れた。新鄭市は、春秋時代の鄭、戦国時代の韓の都であった。その宿泊先ホテルに置かれていた現地の地図に、韓王陵の遺跡の場所が載っていた。事前に調べた観光情報には無く、韓の遺跡は無いと思っていたので、私は見つけた時、思わず叫び声を上げたくらいとても感激した。

そして翌日の早朝、私は王陵近くへ行くバスに乗った。車掌に王陵の話をする、行くのを止められたが、何とか説得し、近くで降ろしてもらえることになった。私を乗せたバスは町を抜け、野原の中の一本道を走ると、小

さい集落の中に入って行った。そして食品を売る店の前で止まった。車掌が私を連れて降り、店長らしき女性に私を託した。走り去るバスを見つめている私に、店長が「王陵に行くのは無理よ。止めなさい」と言ってきた。私は驚き、「道だけ教えてくれれば一人で行きますから」と言ったが、呆れた顔をして店の奥に引っ込んでしまった。一人、店の前に残された私はひどく心細い気持ちになった。楽しみにしていた遺跡に行けないかもしれないと悲しくなった。しばらくその場に立ちすくんでいると、店の前に村人たちが集まって来て、私を物珍しそうに見て何か話し合い始めた。どうやら、王陵は一人で行けない場所にあり、道案内を誰にするかで相談しているようだった。すると、小柄なお爺さんが煙草をふかしながら遠くから歩いてきた。村人の一人が私に近づいてきて、そのお爺さんを指さして言った。

「あの方が案内してくれるよ！」

お爺さんは李さんと言った。中山装を着て、傷んだ靴を履いていた。その昔気質な様子が私の祖父と似ていて、初対面なのに私は親近感を持った。私たちはトウモロコシ畑のあぜ道を歩いた。最初、李さんは寡黙だったが、私と打ち解けると、辺りの畑を指さして「この畑もあの畑も全部私のもの」と話し出した。代々トウモロコシ農家で、今は、子供が都会へ働きに出たので、夫婦だけで暮らしているという。李さんは私がカメラで風景を撮っているのを見て、好奇心に駆られたのか、「自分を撮ってほしい」と言ってきた。私は喜んで承諾すると、畑をバックに李さんを撮った。背筋をピンと伸ばしたその姿はとても誇らしげだった。

目的の王陵はあぜ道とトウモロコシ畑を抜けた先にあり、1時間くらいかかった。到着した時、私はそれが王陵とは分からなかった。それは立派な公園ではなく、淡い黄緑色の畑の中に埋もれるように濃い緑色の小高い丘が4つ並んでいるだけのものだった。その墓とおぼしき塚は蔦に覆われ、説明を受けないと王陵とは分からなかった。

李さんは「王陵は東西に4つ並んで、北を向いている」と教えてくれた。そして私に「せっかく来たのだから登ろう」と言って、2mほどの高さの丘の上へ、蔦をかき分けながら先に登って、私を引っ張り上げてくれた。私は草と泥まみれになりながら登った。丘の上からの景色は、見渡す限りのトウモロコシ畑だった。村は見えなかった。李さんは私に何度も「満足したか？」と尋ねた。私は笑顔で「満足したよ」と答えた。本当に心の底から満足していた。こんな所まで来ることができるとは思わ

なかった。しばらく私たちはそこに佇んで風景を眺めた。

王陵から帰る途中、私は李さんにお金を払うと言った。こんな遠くまで案内してもらって申し訳ない気持ちだった。だが、李さんは「不要」と言うばかりで、何度私が言っても頑なに断った。そして村に戻ってくると、心配していた村人たちが私たちの姿を見て集まってきた。私が村人の質問攻めにあっている間に、李さんはいなくなってしまった。結局、私はお別れもお礼もできないまま帰りのバスに乗ることになってしまった。

李さんは単なる親切心で私を案内してくれたのだろうか。私は今まで、李さん以外にも、中国で親切な人に沢山会った。他の国々にも旅行したことがあるが、そういう出会いは中国だけだ。それはよそから来た人をもてなす文化なのだろうか、それとも地元に誇りをもっているからなのだろうか。はっきりとは分からない。だが、私はそういう中国人の気質が好きだ。だから中国に何度も旅行しているのだと思う。

最近は技術革新のおかげで、スマホ一つあれば、簡単に交通経路が分かるようになり、中国の人に道を教えてもらう必要はなくなった。もう、あのような出会いは少なくなってしまうのだろう。

日本に帰った後、私は一筆したためた日本の絵葉書を、あの時の写真に添えて李さんに送った。も一緒に添えた。私のせめてものお礼のつもりだ。

豊田 恭子 (とよだ きょうこ)

1973年大分県生まれ。1997年、福岡県立福岡女子大学文学部国文学科卒業。同年、国家公務員として採用。2021年8月現在は検察庁にて勤務。



李さんとトウモロコシ畑

「私の中国物語」その③

職業、武術家兼外交官

アスリート 大川 智矢



2016年第1回W杯 in 中国での剣術の演武

私は中国発祥のスポーツ「武術太極拳」の日本代表をしている。実際に相手と戦うのではなく、カンフー映画に出てくるようなカッコいいポーズをキメ、体操やフィギュアスケートのようにフリースタイルで技の美しさやジャンプの高さで点数を競うというもので、五輪種目を目指しているこれからのスポーツだ。

2012年大学2年生の夏、私は今後の進路に悩んでいた。外交官になるか、武術の世界で食っていくか。中国関係の専攻だったため、日中関係に携わる仕事をしたい、と漠然と思っていた。小学4年生から武術太極拳を続けているがなかなか日の目を見ることができず、あと1年本気でやって結果が出なければもう辞めようと思っていた。当時はまだ日本代表にもなっていなかった。できるところまでやりきってから外交官を目指そうと考えた。

中国発祥のスポーツなのでやはり中国が非常に強いということもあって、北京市「什刹海体育運動学校」に長期遠征することに決めた。ハリウッドスターのジェット・リーを輩出した名門である。プロの世界に身を置くことができると心躍っていた。

そんな最中、尖閣問題が激化した。

テレビでは中国現地の日本企業が攻撃されるなど過激

なデモが取り上げられ、外務省からは渡航注意の要請が出た。周囲の反対もあり、中国に行くことができる雰囲気では全くなかったけど、あと1年本気でやると決めたんだ、行くしかない！と、意を決して訪中することにした。「練習会場以外では日本人だということは隠す」、「話す言葉は中国語だけ」ということをルールにした。

各種手続きを済ませて、なんとか無事に北京市の体育学校に到着することができた。練習会場に行く途中、「日本人というだけで無視されたらどうしよう」「せっかくの長期滞在が無駄になってしまわないか」と、どんどん視界が狭くなっていった。

会場のドアを開けるとすでに選手たちがウォーミングアップをしていた。話しかけられる雰囲気ではなく、流れのまま自分も食らいつくように練習に参加した。もともと覚えが悪く、緊張していたこともあり、それを見かねた選手たちが手取り足取り、何度も言葉を変えてアドバイスをくれた。なんだ、凄くフレンドリーじゃないか！

ホッとしてきたところ、僕が考えた動作の形がちょっと変でおもしろい、と笑われてしまった。よくよく中国語を聞き取ってみると、彼らは「釣魚（魚釣り）」と言っていることが分かった。釣り竿を投げているように見えるということだった。

僕はその時、一瞬で血の気が引いた。彼らは釣り竿を投げている動きに見えるから笑っているんじゃない。尖閣諸島の中国名「釣魚島」にかけて笑っているのだと。遂に、不安に思っていたことが起きてしまった。いたたまれなさ、今まで直面したことのない感覚に、私は合わせて笑うしかなかった。モヤモヤした気持ちのまま練習を終えた。

その日の夜、北京チームのみんなが歓迎会だといって食事に誘ってくれた。練習では一時打ち解けたものの、またからかわれたりするのではと緊張しながら指定されたお店へ行った。先についていたチームメイトの輪の中に入り、日本での生活のことや流行っているアニメのことで盛り上がった。すっかり緊張もほぐれて、ちゃんと

お互いに意思疎通ができそうだった。食事もひと段落して、お店にあったテレビにふと目をやると、尖閣諸島のデモ映像が流れていた。これからも仲良く付き合っていくためにこの問題は避けてはいけない。引っかけりのあった私はその場の勢いに任せて、この問題をどう思うかを率直に聞いた。そうするとチームメイトはあっけらかんとして言った。「これは政治の問題でしょ？ 武術太極拳をやっている僕たちの仲が良ければ、まずはそれでいいんじゃないの？」質問をした自分を恥じてしまった。中国人と日本人、大きくくくる前に、私たちは一人の人間だ。もちろん起きてしまっている事件や問題などはちゃんと知っておく必要はあるけど、今私の目の前にいるチームメイトにはそんなことは関係ない。武術太極拳が外交の問題を超えた瞬間だった。可口可乐で乾杯し、羊肉串を流し込んだ。

約二カ月の遠征が終わり、目標にしていた世界選手権に出場することができた。滞在中一緒に練習していた北

京チームの選手にも再会、それぞれの部門で優勝することができ、互いの健闘をたたえた。その結果は、当時大学3年生で進路に悩んでいた僕の背中を押した。本気で武術で飯が食えるようにしようと覚悟を決めて、試行錯誤の日々が始まった。現在は武術太極拳の普及のために全国各地でコーチングをしている。北京で経験した想いを胸に、日中友好のためのイベントでも実行委員長を務め、海外からコーチを依頼されることも増えた。各地で武術太極拳の縁が繋がっていく。漠然となりたかった外交官の夢は、「武術太極拳を通した民間の外交官」として叶いつつある。

大川 智矢（おおかわ ともや）

北海道江別市出身、中央大学卒。2013年世界武術選手権初出場・初優勝を皮切りに、国内外の大会で好成績をおさめる。現在はNPO法人太極拳友好協会にて運営に携わり、全国・世界でコーチングや講演、CMやGENERATIONS from EXILE TRIBEの作品に出演したりなど、多方面から武術太極拳の普及活動に取り組む。読売新聞社「日本スポーツ賞」、文部科学省「スポーツ功労者顕彰」受賞。

「私の中国物語」その④

南翔饅頭店、外滩、エンさん。上海の思い出話。

会社役員 一番ヶ瀬 絵梨子

2020年、9歳（当時）の娘が「第3回 忘れられない中国滞在エピソードコンテスト」で三等賞をいただいた。

中国大使館で行われる授賞式とパーティーを楽しみにしていたのだが、残念ながらコロナで中止に。「今年こそ行きたいから、次はおかあさんが入賞してね！」と言われて、いまパソコンに向かっている。

さて、何を書こうか。

約20年前の、上海出張。1年間の世界一周旅行の最後に、上海からフェリーで日本に戻ったこと。子連れでの初海外旅行が北京だったこと。憧れの「ビニール袋ビール」を飲むために青島へ行ったこと。

本格的な四川料理店を食べに成都にも行きたいし、大好きな映画「小さな中国のお針子」のロケ地になった湖南省の風景をこの目で見たい。雲南省や海南島にも興味がある。

と、このように書きたいことは山ほどあるのだが、文章で綴るとなると、特に印象深く思い出すのはエンさんと上海出張のことだ。



2007年、南翔饅頭店近くの豫園にて

2002年だったと思う。私が当時勤めていたIT企業が上海でオフショア開発をすることになり、上海の会社との窓口になるために日本に来たのがエンさんだった。

当時25歳くらいだった私と同年くらいの、背の高い謙虚なイケメン。仕事の進捗を聞くと、いつもニコニコ笑って「大丈夫です」と答えてくれた。しかしその後、まったく大丈夫ではなかったことが判明して大問題になったのだ。問い詰める私にエンさんは、「『大丈夫』が、いちばん便利な日本語でした」と言った。

今であれば、あの状況下のエンさんが大丈夫なはずがないとわかる。でもあのときの私には、慣れない国で、母国語ではない言葉で働く方に対する想像力が決定的に欠けていた。申し訳なくて、自分が情けなくてショックだった。あのときのエンさんの顔は今でも忘れられない。

エンさんとの思い出は、もちろん苦いものばかりではない。

私の上海出張が決まったとき、エンさんはホワイトボードに大きく「南翔饅頭店」と書き、「上海でいちばん美味しいお店です。絶対に行ってください」と、とても誇らしげに教えてくれた。

南翔饅頭店が六本木ヒルズに出店する前で、今のようLCCも飛んでいなかった時代。早々に知れたのは、私の密かな自慢である（南翔饅頭店はエンさんの誇りに違わぬ名店で、上海へ行くたびに訪れている）。

そして、初めて訪れた上海。見上げるような高層ビル、サッとドアを開けてくれるレディーファーストな男性たち。大都会だと聞いてはいたが、それでも圧倒されるほど都会だった。

井になみなみと入った豆乳と揚げパンの朝食に、さらびやかな高級レストランでの食事（夢のように美味しかったキノコの薬膳スープと桂花糯米藕はいまだに忘れられない）、全聚徳で初めて食べた本物の北京ダックも記憶に刻まれている。

入社3年目、「海外出張を体験させてやろう」という上司の温情で決まった出張だったこともあり、仕事もそこそこに浮かれて過ごした。3回ほど連れて行ってもらっただろうか。ありがたい、いい思い出だ。

一方、オフショア先の方々と直接会い、中国語と日本語を自在に操るエネルギッシュな社長と話すにつけ、

「工数が安いから海外に出す」という発想でのオフショア開発はうまくいかないだろうと感じたことも覚えている。彼らが自分や自社の人たちよりも「安い」とはどうしても思えなかったからだ。

実際、そのオフショア案件は失敗に終わった。原因は母国語が違うことと遠隔でのやりとりによる齟齬ということになったが、それだけではなかったと思っている。

私は今、ベンチャー企業で会社役員の立場にある。優秀な人に安く頼めないものか、と考えることもあるが、そんなときにふとあの上海出張を思い出す。どんなビジネスも世界を主戦場にせざるを得ない今、正当な対価を惜しむ会社に未来はないだろう。

エンさんの「大丈夫」の一件で他人と働くにあたっての心構えの基本を認識し、上海出張でいろんなことが世界規模になっていることと会社が採るべき基本スタンスを学べた。あのときはまだ若くよくわかっていなかったが、20年後の今、どれだけ大きな経験をさせてもらったかを実感している。

さて、南翔饅頭店と一緒にエンさんが教えてくれた上海自慢が外灘（バンド）の夜景だ。出張だったこともあり当時は行けず、その後の旅行でも昼間にしか行けていなかったのだが、2018年の家族旅行でついに黄浦江のナイトクルーズに参加した。

東方明珠塔のあるカラフルな浦東エリアと、その対岸のゴールド中心にライトアップされた外灘エリア。あの控えめなエンさんが力強く自慢するはずだと、15年以上の時を経てしみじみ感じた。

連絡先どころかフルネームも覚えていないエンさんには今後会うべくもないが、ずっと忘れることはないと思う。そして上海は、仕事関係なく何度でも行きたい都市だ。私の住む名古屋にも南翔饅頭店はあるが、上海へ食べに行ける日が待ち遠しい。

一番ヶ瀬 絵梨子（いちばんがせ えりこ）

1977年兵庫県生まれ。名古屋在住。大学卒業後、システムエンジニアとして就職。出産を機に退職後、フリーライターとして活動を始め、現在はウェブ編集者。モノリシックス株式会社COO。旅行が趣味で、新婚旅行では一年かけて50か国を訪問。家族でも国内外を旅している。旅先で現地の美味しい食べ物とお酒を探すのが最大の楽しみ。第3回「忘れられない中国滞在エピソード」で、小学生の娘が一足先に三等賞に入賞している。